

## 研究結果報告書

植民地統治期における在朝日本人集落の形成に関する研究  
－移住漁村 郷友会員を中心に－

所属： 国立民俗博物館  
役職： 学芸研究士  
氏名： 吳 昌炫

今回の研究では、戦前の植民地統治期に、慶尚北道・浦項市・九龍浦に居住した在朝日本人のうち、香川県小田村（現、さぬき市）出身者を中心とした現地調査と文献調査を行った。同調査・研究結果から以下の大きく2つが確認できた。

まず、終戦以後、朝鮮から日本に引き揚げた漁業従事者が生業をどのように再構築したかを調査・検証した。その結果、引揚漁業者の生業は、大きく2つのグループに区分できた。一つは、朝鮮半島近海での漁労活動に代わり北海道や東北地方、九州などへ漁業のベースを移して、改めて遠隔地操業を始めたグループである。もう一つは、朝鮮半島に近い山口県の下関市や済州道に本拠地を置いて朝鮮半島と日本を往復しながら植民地時代と類似した漁業を継続したグループである。

次に、朝鮮の九龍浦（慶北浦港市）とその近隣に在留した戦前の在朝日本人が日本国内とどのような関係を持って生活していたかを調査した。生業の側面から見ると、戦前の在朝日本漁業者は朝鮮に居住し、朝鮮人たちと緊密な関係を維持しながら生業を行ったが、在朝日本人漁業者が漁獲した魚は最終的に日本国内へ運搬されて消費されたため、在朝日本漁業者の生業は根本的に日本内市場と分離されてはいなかった。

このような状況は、在朝日本人漁業者と朝鮮人との関係あるいは、彼ら自身の出身地との関係においても見ることができる。在朝日本人漁業者の第1世代は、生計のために朝鮮人と（おもに朝鮮人を雇うことによって）生業を立てて行かなければならなかった。しかし、生業活動をしなない第2世代は、朝鮮人と住居において、あるいは社会空間的に分離されていた。第2世代の場合は 高等小学校に入学して初めて（恵まれた環境にある）数少ない朝鮮人と接触する機会があるだけだった。他方、在朝日本人漁業者は自身の日本国内出身地との関係を日帝の敗戦まで維持し続けた。彼らは定期的に日本国内の出身地に帰省したり、朝鮮の小学校を卒業した自分の子供たちを出身地で上級学校に進学させていた。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

第五回全国海洋文化学者大会、8月21日から23日

“植民地前後在朝日本漁業者の動向—香川県志度町の漁業者を中心して”

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

発表文に基づいて準備中

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

準備中